様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｈ００５５５

研究課題名（和文）重層化する不確実性へのレジリエンス：水産物サプライチェーン研究の課題と実践

研究課題名（英文）Multiple resilience against determinacy: Challenges for studies in fisheries commodity supplychains

研究代表者
赤嶺　淳（AKAMINE, Jun）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：９０３３６７０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　34,500,000円

研究成果の概要（和文）：経済活動が爆発的に拡大した1950年代以降の現代社会は大加速時代（Great Acceleration）あるいは人新世（Anthropocene）と称される。現代を象徴する大量生産・大量消費の生活様式が、気候変動や海洋環境はもとより、紛争／戦争などの種々の不確実性を高めてきたとの認識にたつ本研究は、そうした不確実性に対して、いかに関係者（stakeholders）が対応／適応しようとしているか、その動態を記述するとともに、適応力（レジリエンス）の高い水産業へ転換していくための社会的課題をあきらかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
2019年度からはじまった本研究プロジェクトは、初年度末よりCovid-19の感染拡大という、まさに不確定で偶発的な事態に直面することとなった。2022年2月にロシアのウクライナ侵攻、2023年10月にハマスとイスラエル政府間による戦争が生じるなど、冷戦終結後に構築されたサプライチェーンが崩壊する時期に期せずして本研究を推進することとなった。油脂ひとつをみても、油脂間相互の影響は小さくなく、こうした事態は、第1次世界大戦から第2次世界大戦のあいだの大戦間期に創発したことが、あきらかとなった。こうしたことから、本研究では、「油脂間競争」なる概念を提出し、今後の研究課題のひとつとした。

研究成果の概要（英文）：Anthropocene or the Great Acceleration is the term that captures the negative characteristics of the contemporary world, which emerged in the 1950s. Both the large-scale production and consumption contribute to the emergence of the Anthropocene, which ends up with climates change, marine environmental degradation, and conflicts/wars around the world. On the other hand, the global supply-chain (GSC), bridging production and consumption, can provide food security at the minimum costs. It is only possible, however, to appreciate the GSC's contribution when the world keeps its peace and order. If it is up against contingency and indeterminacy, the GSC becomes fragile as one observes during the Covid-19 pandemic period followed by Russia's war in Ukraine. The research project pursued how one was able to maintain stable marine commodities flow in the days of uncertainty.

研究分野：フードスタディーズ

キーワード：油脂間競争　不確実性　偶発性　サプライチェーン　資本主義　認証制度　食の安全保障　食の主権

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

経済活動が爆発的に拡大した 1950 年代以降の現代社会は大加速時代（Great Acceleration）あるいは人新世（Anthropocene）と称される。本研究は現代を象徴する大量生産・大量消費の生活様式が、気候変動や海洋環境をはじめとする種々の不確実性を高めてきたとの認識にたち、そうした不確実性への適応力（レジリエンス）の高い水産業へ転換していくための社会的課題と対応策をあきらかにすることを目的とした。本研究は、米国カリフォルニア大学サンタクルス校の人類学者アナ・チン氏が著書『マツタケ』（みすず書房、2019 年）で展開した「不確実性と偶発性に着目した社会科学の構築」がもとめられている、との主張に共鳴したことを背景としている。

２．研究の目的

マグロ類やサケ類など日常的に消費される魚類の遺伝資源から養殖飼料用の魚粉までを対象とし、(a) 生産から流通、消費をつなぐサプライチェーン（SC）の成立過程、(b) SC に生起する重層化した不確実性の因果関係群の相互関係を分析し、(c) 各種の認証制度をふくむ、不確実性に適応しうる社会的対応策を提言する。水産物が食料資源であり、個別魚種の SC が食システムの構成要素である以上、各事例に共通する要因群の分析を通じて、水産業全体のレジリエンスを向上させていくことが重要であり、そのためは個人研究を束ねる共同研究が不可欠である。

３．研究の方法

問題が生起する現場におけるフィールドワークを中心としたが、Covid-19 の感染拡大により、2019 年度、2020 年度、2021 年度の 3 年間は当初に予定していたフィールドワークの実施が困難であったことも事実である。当然ながら、その 3 年度間は、それぞれが文献を中心とした研究をおこなうことに徹し、研究に深みと広がりをもたらすことができた。Covid-19 の感染拡大がおちつきをみせた 2022 年度の夏期からは、遅れをとりもどすべきフィールドワークをおこなうことができたことは、さいわいであった。

なお、本研究では、方法論として「マルチ・サイテッド・アプローチ」（MSA）の検証／吟味をかかげていた。2019 年度からの 3 年間を棒にふらざるをえなかったことが悔やまれるものの、2023 年 3 月に元捕鯨者や捕鯨問題について取材を重ねるジャーナリストをはじめ、狩猟や農業、環境など広義の食糧問題に関心をもつ（次世代）研究者ら 7 名とともに韓国南東部において東洋捕鯨株式会社（のちの日本捕鯨株式会社、日本水産株式会社）が構築した捕鯨基地・捕鯨産業の歴史と現在を考察する共同研究を実施することができたことは、成果のひとつといえる。キャリアや視点を異にする人びとが、共通テーマにもとづいて共同調査をおこなうという知的実験は、想定以上に刺激的なものであった。その成果は湯浅・辛・赤嶺（2024a, b）として公刊することができた。調査から 1 年で論文を公刊できたことはもちろん、執筆過程においても、共同執筆者である大学院生 2 名への教育的効果が得られたものと評価している。

４．研究成果

Covid-19 の感染拡大の影響により想定していた調査研究ができないという困難が発生した一方で、いまや常態化しつつある気候変動（地球温暖化）、ロシアのウクライナ侵攻、イスラエル政府軍のガザ侵攻などがつづいたことは、本研究プロジェクトのテーマである「重層化する不確実性へのレジリエンス」を考察する貴重な機会でもあった。

赤嶺淳は、魚油・鯨油の生産と流通の歴史と現在について文献研究とフィールドワークを実施した。いわゆる捕鯨問題は、現在、「鯨肉を食べる」ことの是非に議論が収斂してしまったきらいがあるが、捕鯨史を紐解くと、日本が戦前に 7 回おこなった南極海での母船式捕鯨も鯨油生産を中心としたものであったことがわかる（Akamine 2020）。こうした史実に着眼し、液体油を固形化する水素添加法が 20 世紀初頭に発明され、マーガリン原料としての需要が爆発した「油脂」のサプライチェーン構築史を俯瞰するべく、文献レビューを展開した（赤嶺 2023）。同時に現在、EEZ で操業している日新丸捕鯨船団に同行し、母船式捕鯨の一部始終を観察する機会を得た。この 5 年間の研究を通じ、これまで歴史研究者や民俗学者が牽引してきた古式捕鯨業と文化人類学者が先導してきた先住民生存捕鯨とは異なる、「日本水産業の近代化に果たした捕鯨業の位置づけ」という、あらたな展開についての展望を得ることができた。

長津一史は、マグロ類やハタ類などの海産物をめぐるグローバルな社会史的相関を、生産、加工から消費までの商品連鎖と、それらに携わる労働、特に移民労働の経験や記憶に着目して考察することを試みた。関係地域は、日本（宮城県気仙沼、和歌山県太地町）、インドネシア（スラウェシ島、ジャワ島）、アメリカ（ロサンゼルス）である。マグロ類に関しては、アメリカを主要な消費地とする 1900～1940 年代と、日本をおもな消費地とする 1970 年代～現代をとりあげ、移民労働者を主とする周縁者の視点から、海産物のグローバル・ヒストリーを比較・検討した。アクターとしては、ロサンゼルスに移住した和歌山県出身のマグロ漁船員やツナ缶工場労働者、マグロ漁船の日本人船員、インドネシア人船員、インドネシア人技能実習生、特殊海産物を採捕するインドネシアの海民を対象とした。以上の調査をふまえ、海産物をめぐる市場と移民労働と地域社会のグローバルな絡み合いが、長期の歴史軸で、場所、アクター群、生産技術、消費のあり方を変化させつつ繰り返されてきたこと、その基本的な構図は、移民労働への依存、収奪型の資源利用、海民の移動志向性等の点で共通することをあきらかにした。

福永真弓は、養殖サーモンの市場拡大とご当地サーモンのための育種が急速に進むニジマスについて、日本における育種の歴史的経緯から、サーモン化するために用いられるフィードオイル、アスタキサンチンなど他の魚介類から抽出される成分生産まで研究を継続した。肉食魚類の養殖飼料となる魚類は、気候変動により資源生産がいっそう不安定化し、しかも乱獲が進んだことがあきらかとなった。そこで給餌が必要な魚類養殖でなく、無給餌養殖にグローバル市場が注目していることを踏まえ、大型藻類および微細藻類の養殖に関する調査を進めた。とりわけ、日本が歴史的に利用してきた大型藻類のワカメ・コンブについて、ブルーフード生産など急速に進む新たな資源化の波や、小規模生産者によるグローバル市場におけるニッチ形成について着目し、藻類をインフラとする資源システムが興りつつあることを確認することができた。

大元鈴子は、水産物の持続可能性を定義する試みとして、国際的な認証制度とエコラベルをひとつの媒体として、地域の水産業がどのように認証制度に翻弄されたり、また、利用したりしているかについて、現地フィールドワークを通じてあきらかにした。事例としては、気仙沼における産業クラスターとしてのサメの総合的利用が国際的動向である反フィニングによるマーケットの縮小にさらされるなかで、気仙沼船団が MSC 認証を目指すことで、みずからを世界にさらして市場回復を図る試みとして取りあげた（Omoto 2023）。また、認証制度そのものの役割変化を、「創世期」「定着・乱立期」「業界標準期」として論じた論文も発表した（大元 2023）。国際認証

制度は、持続可能性をアピールし、製品の差別化をはかるための手段としてはもはやあまり意味がなく、前競争的な持続可能性を必要とする同業者の協働のためのツールとなったといえる。沖縄県恩納村の事例では、温暖化による高海水温や台風の巨大化に対応する養殖モズクの系統選抜と養殖技術、さらに加工技術の向上により漁協と加工会社が連携してなんとか対応している様を10年通ってやっと英語論文として発表できたことは（Omoto et al. 2024)、本科研の成果である。

高橋五月は、長年にわたり茨城県および福島県の沿岸水域で漁業を営む人びとを対象に調査研究をおこなってきたが、本プロジェクトを通して、不確実性が漁業や水産物サプライチェーンに与える影響について、また災害やパンデミックといった困難に直面した人びとにとってレジリエンスとはどのように実践されるものなのかという問いについて深く考察することができた。とくに、本研究を通して深めることができた不確実性やレジリエンスについての考察や知見は、単著*Fukushima Futures: Survival Stories in a Repeatedly Ruined Seascape*（University of Washington Press, pp. 235）を執筆する際に大いに役立った。また、コロナ禍がようやく落ち着き、海外渡航が可能になった2022年にはアメリカ合衆国にて海の不確実性とレジリエンスについて探究する現地調査を実施することができ、2023 年にはカナダ・トロントで開催された国際学会（American Anthropological Association）での口頭発表を通して本科研プロジェクトの研究成果を発表し、国際研究ネットワークの構築に貢献することができた。

濱田武士は、タラコおよびサケ魚卵を対象に、調査研究をおこなった。タラコの食の起源は、日本では主として北海道で明治期（入植者の新潟県人の可能性もあり)、朝鮮半島北部の2箇所である。日本の韓国併合後、朝鮮半島で日本人が辛子明太子を開発し、それを九州に持ち込んで根付かせた。しかし、現在タラコ原料はロシア産、アメリカ産がほとんどを占める。イクラはヨーロッパで食されていたが、それはトラウトか、チョウザメであり、パンにぬるトッピング材的な存在であった。ロシア人のあいだで広がり、その食文化が日露戦争後に極東経由で日本に伝播した。ただし、食べ方はお米と併せてであった。一方、日本では東北地方において近世期からサケの筋子が食されていた。おにぎりの具材として農民が畑仕事中に食した。現代の筋子・イクラは、ロシア産、アメリカ産がほとんどで、一部北欧産がある。サケ魚卵は国産原料ものがほぼなく、ロシア産についてはほぼ韓国事業者の仲介により釜山で取引されている。サプライチェーンの発展と国際化が近代に大衆化した食材の支えとなっていることを実証することができた。

濵田信吾は、ニシンを事例として市場経済と環境変化が地域水産業に与える影響について、スウェーデン東部と米国アラスカ州南東部、北海道でのフィールドワークを実施した。2019 年はアラスカでのフードスタディ国際学会に赤嶺、福永らとともに参加し、学会内でも数少ない水産業をテーマとしたセッションを米国・台湾の研究者らとともに企画したことは、本研究の国際研究ネットワーク強化に貢献できた。2019 年に現地調査とともにはじめたスウェーデンにおけるバルト海の環境要因が郷土食の味評価に与える影響に関する研究は、COVID-19 の流行とともに遅れた。しかし、日本国内に滞在しつつ、2019 年に入手したスウェーデン語の地域漁業史の資料の翻訳を進めつつ、『世界の食文化百科事典』（丸善出版、2021 年）を共編出版することができた。さらに、2023 年にはアラスカ大学の協力を得て、南東アラスカにおける長期調査を実施した。その結果、地域沿岸漁業と水産業には、その地域の環境・政治経済要因のみならず、消費地の環境変化や政治経済もその資源管理や海洋政策、そして水産サプライチェーンに影響を及ぼしていることがあきらかとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計31件（うち査読付論文　23件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　13件）

１．著者名 湯浅俊介、辛承理、赤嶺淳	４．巻 16
２．論文標題 韓半島東南部における捕鯨の記録①ーー韓海に君臨した東洋捕鯨株式会社	５．発行年 2024年
３．雑誌名 一橋社会科学	６．最初と最後の頁 1－28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 湯浅俊介、辛承理、赤嶺淳	４．巻 16
２．論文標題 韓半島東南部における捕鯨の記録②ーー韓国捕鯨の「挫折」と捕鯨政治	５．発行年 2024年
３．雑誌名 一橋社会科学	６．最初と最後の頁 29-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Omoto Reiko、Uehara Masato、Seki Daigo、Kinjo Masaru	４．巻 16
２．論文標題 Supply Chain-Based Coral Conservation: The Case of Mozuku Seaweed Farming in Onna Village, Okinawa	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Sustainability	６．最初と最後の頁 2713-2713
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/su16072713	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大元鈴子	４．巻 29
２．論文標題 「前競争的協働」時代の国際水産認証制度とエコラベルの役割－認証制度を基盤にした主体間ネットワーク形成に注目して	５．発行年 2023年
３．雑誌名 環境社会学研究	６．最初と最後の頁 38-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takahashi Satsuki	4．巻 24
2．論文標題 Seeing the Unseeable: Cultivating "Response-ability" in Aquariums	5．発行年 2024年
3．雑誌名 法政大学人間環境学会	6．最初と最後の頁 153-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 濵田信吾	4．巻 14
2．論文標題 「酸っぱいニシン」：シュールストレミングの歴史と発酵食文化としての継承をめぐる諸問題	5．発行年 2024年
3．雑誌名 大阪樟蔭女子大学研究紀要	6．最初と最後の頁 47-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 濵田武士	4．巻 51
2．論文標題 ロシア軍のウクライナ侵攻下における日ロ漁業外交 ―― 日ロ漁業関係の新たな局面を考察する	5．発行年 2023年
3．雑誌名 北日本漁業	6．最初と最後の頁 128-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 濵田武士	4．巻 63
2．論文標題 沿岸漁業における「技術の進歩」とスマート水産業 ―技術論から見た政策課題	5．発行年 2023年
3．雑誌名 地域漁業	6．最初と最後の頁 59-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34510/jrfs.63.2_59	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤嶺淳	4．巻 47
2．論文標題 日本近代捕鯨史・序説ーー油脂間競争における鯨油の興亡	5．発行年 2023年
3．雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6．最初と最後の頁 393～461
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15021/00010032	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 赤嶺淳	4．巻 16
2．論文標題 鯨食文化と鯨食習慣の重層性ーー鯨食文化はナショナルなのか？	5．発行年 2023年
3．雑誌名 鯨研叢書	6．最初と最後の頁 4-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Omoto Reiko	4．巻 10
2．論文標題 Mobilising international resource management certification schemes: Re‐configuration of the global shark fin supply network by producers	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Geo: Geography and Environment	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/geo2.117	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 福永真弓	4．巻 23
2．論文標題 魚のまなざす海ーー多種間の政治と人間であること	5．発行年 2023年
3．雑誌名 政治思想研究	6．最初と最後の頁 118-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 福永真弓	4．巻 50
2．論文標題 培養肉的生と付き合う	5．発行年 2022年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 81-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 濱田武士	4．巻 47
2．論文標題 オホーツク海で発生した2つの事件と日ロ関係	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ボストーク	6．最初と最後の頁 3-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 久保明教	4．巻 14
2．論文標題 コントロールされた多義の誤謬 ： ヴィヴェイロス・デ・カストロにおける人類学的翻訳	5．発行年 2021年
3．雑誌名 くにたち人類学研究	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Akamine Jun	4．巻 104
2．論文標題 A preliminary analysis of coastal minke whaling in Norway: Where did it come from, and where will it go?	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Senri Ethnographical Studies	6．最初と最後の頁 53-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Akamine Jun	4．巻 10
2．論文標題 Tastes for blubber: diversity and locality of whale meat foodways in Japan	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Asian Education and Development Studies	6．最初と最後の頁 105～114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1108/AEDS-02-2020-0027	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤嶺淳	4．巻 249
2．論文標題 理性か、性か？　ナマコ食文化の存続をにぎる壁	5．発行年 2020年
3．雑誌名 海洋と生物	6．最初と最後の頁 322-327
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hamada Shingo	4．巻 11
2．論文標題 Decoupling Seascapes: An Anthropology of Marine Stock Enhancement Science in Japan	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Environment and Society	6．最初と最後の頁 27～43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3167/ares.2020.110103	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 福永真弓	4．巻 26
2．論文標題 喪失と創作：気候変動と社会実験的日常	5．発行年 2020年
3．雑誌名 環境社会学研究	6．最初と最後の頁 44-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 福永真弓	4．巻 26
2．論文標題 間にあり続けるために：卯田宗平氏の書評にこたえて	5．発行年 2020年
3．雑誌名 環境社会学研究	6．最初と最後の頁 185-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 福永真弓	4．巻 116
2．論文標題 サケを食べるということ	5．発行年 2020年
3．雑誌名 北海道立北方民族博物館友の会機関誌　アークティック・サークル	6．最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤嶺淳	4．巻 149
2．論文標題 近代捕鯨のゆくえ――あらたな鯨食文化の創発にむけて	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国立民族学博物館調査報告	6．最初と最後の頁 55-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 赤嶺淳	4．巻 15
2．論文標題 多様性あってこその伝統食ーー戦前期の食生活調査にみる鯨食のゆたかさ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	6．最初と最後の頁 9-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤嶺淳	4．巻 29
2．論文標題 ノルウェーにおける沿岸小型捕鯨の歴史と変容ーーミンククジラ肉のサプライチェーンを中心として	5．発行年 2020年
3．雑誌名 北海道立北方民族博物館紀要	6．最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Akamine Jun	4．巻 5
2．論文標題 Multiplicities of Japanese Whaling: A Case Study of Baird’s-Beaked- Whaling and its Foodways in Chiba Prefecture, Eastern Japan	5．発行年 2019年
3．雑誌名 RCC Perspectives: Transformations in Environment and Society	6．最初と最後の頁 65-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5282/rcc/8964	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 濵田信吾	4．巻 115
2．論文標題 北欧ニシン文化と新料理運動の所在	5．発行年 2019年
3．雑誌名 vesta	6．最初と最後の頁 54-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 濵田信吾	4．巻 44(2)
2．論文標題 変容する伝承食ーー福井県嶺南地方沿岸部のサバのヘシコナレズシを事例 として	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6．最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小宮孟、Mio Katayama Owens、濵田信吾、羽生淳子	4．巻 127(1)
2．論文標題 青森県三内丸山遺跡北の谷Iトレンチ拡張区の魚類構成から復原した漁撈活動	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Anthropological Science (Japanese Series)	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1537/asj.181227	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 福永真弓	4．巻 83(1)
2．論文標題 自然と人間の互酬的かかわりとは何かーー遊び仕事からの模索	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ランドスケープ研究	6．最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 福永真弓	4．巻 9
2．論文標題 サステナビリティと正義ーー日常の地平からの素描からの理論化にむけて	5．発行年 2019年
3．雑誌名 サステナビリティ研究	6．最初と最後の頁 133-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計43件（うち招待講演　19件／うち国際学会　34件）

1．発表者名 Takahashi Satsuki
2．発表標題 What If Japan Is the Rule and Not the Exception? What Can We Learn about Social Science By Treating Japan As More Than a Test Case of Western Theoretical Frameworks?
3．学会等名 Association for Asian Studies（国際学会）
4．発表年 2024年

１．発表者名 Takahashi Satsuki
２．発表標題 Talks, Ghosts, and Resistances on the Road: Automobility and Spatial Imaginaries and Actions
３．学会等名 American Anthropological Association（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 福永真弓
２．発表標題 意味ある水を取りもどす
３．学会等名 水循環フォーラム 水循環を可視化する（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 Fukunaga Mayumi
２．発表標題 erra-reforming for socio-ecological salvation: Ways of governing aquatic nutrients for healing a stranger sea
３．学会等名 Decomposing Anthropocene: Exploring a Chemical Ethics Beyond Laboratory（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 Fukunaga Mayumi
２．発表標題 Envisioning future seascapes with our native seaweed: The development of seaweed farming rebuilding for the post-disaster aquaculture communities in Japan
３．学会等名 MARE（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Akamine Jun
２．発表標題 Whales, Orangutans, and the Amazonian Rainforest: Who will be the Beneficiary of the Edible Oil Resource Development in the 20th Century
３．学会等名 Transnational History 1750 - Present（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Hamada Shingo
２．発表標題 Cultivating Kelpscapes: Foodways, Management, and Environmental Issues of Kelp in Hokkaido, Japan
３．学会等名 Sitka Natural History Seminar Series（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Hamada Shingo
２．発表標題 Eating the Herring: Rifts and Responses in the North Pacific
３．学会等名 Evening at Egan Lecture Series, University of Alaska Southeast（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Akamine Jun
２．発表標題 Sea cucumbers, tomatoes, and grapes: Challenges for optimizing local ecology and resources in depopulated towns in southern Hokkaido
３．学会等名 2021 International Conference on Chinese Dietary Culture: Chinese Food Culture: Biological and Ecological Perspectives（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Akamine Jun
２．発表標題 Roles of imported whale meat from Iceland and Norway in the Japanese Market. S13: Building a Region: Arctic Identities and Identiy Politics
３．学会等名 International Sympojium on Arctic Research 7（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Akamine Jun
２．発表標題 Whales, Orangutans, and the Amazonian rainforest: Victims of fierce competition among edible oils production
３．学会等名 International Workshop on Pacific Histories across Species and Borders（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Takahashi Satsuki
２．発表標題 Seeing the Unseeable: Cultivating “Response-ability” in Aquariums
３．学会等名 Annual Meeting of Association for Asian Studies（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Akamine Jun
２．発表標題 Resumption of Commercial Whaling and Whale Meat Foodways
３．学会等名 Association for Asian Studies, the 2022 Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Akamine Jun
２．発表標題 Private collections make public heritage: Displaying whaling as an industry in Japan
３．学会等名 The Rise of Private Museums and Heritage in East and Southeast Asia（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 赤嶺淳
２．発表標題 『マツタケ』に学ぶ――陸と海をつなぐ地球大のモノ研究をめざして
３．学会等名 「人新世」時代のヒトと自然を考える（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 赤嶺淳
２．発表標題 三陸沖にニタリクジラを追う――捕鯨工船日新丸乗船調査
３．学会等名 文明社会における食の布置（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Takahashi Satsuki
２．発表標題 Conspiracies and Coalitions in Japanese Environmental Humanities
３．学会等名 Association for Asian Studies, the 2022 Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Hamada Shingo
２．発表標題 Crisis and Sustainability in Japanese Foodways
３．学会等名 Association for Asian Studies, the 2022 Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Hamada Shingo
２．発表標題 “Surf-and-Turf”: An Overview of Japanese Foods, Cultures and Environments
３．学会等名 Feria De Negocios Virtual Ganbare Nikkei, Colombia Japanese Association（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Hamada Shingo
２．発表標題 Using Marine Organic Matter to Nurture the Soil
３．学会等名 Stone Barns Center Element: The COAST, Stone Barns Center for Food and Agriculture（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Nagatsu Kazufumi
２．発表標題 Social Dynamics of Diasporic Indonesian in Japan: Towards a Comparative Social History
３．学会等名 Japanese Studies in Indonesia: Crisis and Reorientation（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Nagatsu Kazufumi
２．発表標題 The Sea Peoples’ Arts of not Being Governed: Genealogy of the Bajau and its Political Settings in Nusantara
３．学会等名 Seaways, People, and Goods on the Edge of Polities: Decolonizing Maritime Studies in Indonesia（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 長津一史
２．発表標題 気仙沼とインドネシア――マグロをめぐる移動社会史の素描
３．学会等名 山形大学移民社会における多文化共生論（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 長津一史
２．発表標題 マグロとアジアと日本人――気仙沼のインドネシア人船員・実習生からみえること
３．学会等名 村井吉敬の小さな民からの発想 Part．2（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 長津一史
２．発表標題 移動と混淆――東南アジア・バジャウ人にみる共生の技法
３．学会等名 村井吉敬の小さな民からの発想 Part．4（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 長津一史
２．発表標題 「海と生きる」ことの意味
３．学会等名 東洋大学社会学部国際社会学科・連携シンポジウム　防潮堤から考える――東日本大震災11年後の人づくりとまちづくり（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 井頭昌彦
２．発表標題 KKV（DSI）論争にきちんとカタをつけるために
３．学会等名 早稲田大学スポーツ科学学術院講演会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Igashira Masahiko
２．発表標題 A mechanism for persuasively justifying general claims in history, and the challenges involved
３．学会等名 The Asian Network for the Philosophy of the Social Sciences (ANPOSS) and the Philosophy of Social Science Roundtable 2021 Joint Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Nagatsu Kazufumi
２．発表標題 Anthropology in the time of pandemic: What can we do and learn from this crisis
３．学会等名 Online Webinar Hosted by Dept. of Anthropology, Faculty of Cultural Sciences, Gadjah Mada University（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Fukunaga Mayumi
２．発表標題 Some snapshot notes on efforts to stay alive between disasters
３．学会等名 UC Berkeley Ten Years Since 3.11 - Part 1, Coping with Disasters: Disability, Vulnerability and New Ties（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Akamine Jun
２．発表標題 Diversities of sea cucumber foodways in Asia: Sea cucumbers in Asian history and the contemporary world
３．学会等名 Knowledge, Materiality, and Environment in Transpacific Histories of Oceanic Transformation（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Akamine Jun
２．発表標題 Coastal whaling revisited: Whale meat foodways in Japan and Norway
３．学会等名 The Annual Meeting and Conference for Association for the Study of Food and Society（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Akamine Jun
２．発表標題 Sensory and texture: How to appreciate whale meat foodways in Japan as a local dish
３．学会等名 ICAS (International Convention of Asia Scholars) 11（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Akamine Jun
２．発表標題 Sea cucumbers in Asian history: Call for sustainable use for the future
３．学会等名 3rd Int’l Conference on Applied Marine Science & Fisheries Technologies (MSFT) 2019（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Akamine Jun
２．発表標題 Cishen and guangshen: Changing sea sucumber foodways in Southeast Asia
３．学会等名 2019 International Conference on Chinese Food Culture（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Akamine Jun
２．発表標題 The status of matsutake production and trade in Japan
３．学会等名 IWEMM10 (The 10th International Workshop on Edible Mycorrhizal Mushrooms（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hamada Shingo
２．発表標題 Clupea pallasii: Techno-Herring, Stock Enhancement, and Cultivating Seascape in Hokkaido, Japan
３．学会等名 The 15th International Conference on the History of Science in East Asia（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hamada Shingo
２．発表標題 Localizing Taste: Merroir, Seascape, and Techno-Herring in Hokkaido, Japan
３．学会等名 The Annual Meeting and Conference for Association for the Study of Food and Society（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nagatsu Kazufumi
２．発表標題 Political Genealogy of Creolism: The Sea Peoples’ Arts of Coping with the Authorities in Southeast Asian Maritime World
３．学会等名 The 10th European Association for Southeast Asian Studies (EuroSEAS)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fukunaga Mayumi
２．発表標題 Aqua culturing the coast in the Anthropocene: Beyond the science-technological imaginary of marine ranching in the ruins
３．学会等名 15th International Conference on the History of Science in East Asia（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fukunaga Mayumi
２．発表標題 Bunake stories: Japanese salmon fishers and the [re]becoming futures of place- and community-based salmon
３．学会等名 The Annual Meeting and Conference for Association for the Study of Food and Society（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fukunaga Mayumi
２．発表標題 Living as the fishers in the city: Unfolding ontology of urban water for co-imagining a livable coast for shrimp
３．学会等名 The International Symposium for Society and Natural Resources and Management（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fukunaga Mayumi
２．発表標題 Futuring Salmon: Dreams of Marine Ranching Amidst the Ruins of the Anthropocene
３．学会等名 Center for International and Global Studies, Duke University（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計22件

１．著者名 Takahashi Satsuki	４．発行年 2023年
２．出版社 University of Washington Press	５．総ページ数 235
３．書名 Fukushima Futures: Survival Stories in a Repeatedly Ruined Seascape	

１．著者名 Mercier, Annie, Jean-Francois Hamel, Andrew Suhrbier, Christopher Pearce, Akamine Jun	４．発行年 2023年
２．出版社 Academic Press	５．総ページ数 839
３．書名 The World of Sea Cucumbers: Challenges, Advances, and Innovations	

1．著者名 赤嶺 淳	4．発行年 2023年
2．出版社 英明企画編集	5．総ページ数 352
3．書名 クジラのまち 太地を語る――移民、ゴンドウ、南氷洋	

1．著者名 Ryan Tucker Jones, Angela Wanhalla, Jun Akamine	4．発行年 2022年
2．出版社 University of Hawai'i Press	5．総ページ数 336
3．書名 Across Species and Cultures: Whales, Humans, and Pacific Worlds	

1．著者名 Nobayashi Atsushi, Hamada Shingo	4．発行年 2022年
2．出版社 Springer	5．総ページ数 211
3．書名 Making Food in Local and Global Contexts: Anthropological Perspectives	

1．著者名 Miyauchi Taisuke, Fukunaga Mayumi	4．発行年 2022年
2．出版社 Springer	5．総ページ数 356
3．書名 Adaptive Participatory Environmental Governance in Japan: Local Experiences, Global Lessons	

1．著者名 井頭昌彦，久保明教	4．発行年 2023年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 400
3．書名 質的研究アプローチの再検討	

1．著者名 佐藤洋一郎、赤嶺淳	4．発行年 2022年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 396
3．書名 『知っておきたい和食の文化』第5章「鯨食の地域性と保守性――コールドチェーンが変えた鯨食文化」（赤嶺淳）	

1．著者名 Berenice Bellina, Roger Blench, Jean-Christophe Galipaud, Nagatsu Kazufumi	4．発行年 2021年
2．出版社 NUS Press Singapore	5．総ページ数 383
3．書名 Sea Nomads of Southeast Asia: From Past to the Present. Ch7. Maritime diaspora and creolisation: A genealogy of the Sama Bajau in Insular Southeast Asia (Nagatsu Kazufumi).	

1．著者名 鎌田真弓、長津一史	4．発行年 2021年
2．出版社 昭和堂	5．総ページ数 304
3．書名 『大学的オーストラリアガイド――こだわりの歩き方』第4章「アジアとオーストラリアを繋ぐ人びと――海域世界の視座から」（長津一史・間瀬朋子）	

1．著者名 秋道智彌、角南篤、長津一史	4．発行年 2022年
2．出版社 西日本出版社	5．総ページ数 281
3．書名 『海とヒトの関係学⑤　コモンズとしての海』7「バジャウ人の移動する生き様」（長津一史）	

1．著者名 Steffan I.A. Diaz, Hamada Shingo	4．発行年 2021年
2．出版社 Bloomsbury USA Academics	5．総ページ数 280
3．書名 The Cultural Politics of Food, Taste and Identity: A Global Perspective. Ch3 Heritagization Of Fermented Taste In Southwestern Fukui, Japan (Hamada Shingo)	

1．著者名 床呂郁哉、久保明教	4．発行年 2021年
2．出版社 京都大学学術出版会	5．総ページ数 368
3．書名 『わざの人類学』第5章「ポイエーシスとテクノロジーの狭間で――家庭料理における「手作り」の変容」（久保明教）	

1．著者名 岸上伸啓、赤嶺淳	4．発行年 2020年
2．出版社 臨川書店	5．総ページ数 336
3．書名 捕鯨と反捕鯨のあいだに	

１．著者名 清水展、飯嶋秀治、赤嶺淳	４．発行年 2020年
２．出版社 京都大学学術出版会	５．総ページ数 454
３．書名 自前の思想	

１．著者名 野林厚志、赤嶺淳、浜田信吾	４．発行年 2021年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 716
３．書名 世界の食文化百科事典	

１．著者名 池谷和信、赤嶺淳	４．発行年 2021年
２．出版社 農山漁村文化協会	５．総ページ数 456
３．書名 食の文明論	

１．著者名 東京大学未来ビジョン研究センター、福永真弓	４．発行年 2021年
２．出版社 日経BP 日本経済新聞出版本部	５．総ページ数 356
３．書名 未来探究２０５０	

１．著者名 横浜国立大学都市科学部、福永真弓	４．発行年 2021年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 1052
３．書名 都市科学事典	

１．著者名 福永真弓	４．発行年 2019年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 494
３．書名 サケをつくる人びとーー水産増殖と資源再生	

１．著者名 濱田武士・佐々木貴文	４．発行年 2020年
２．出版社 みすず書房	５．総ページ数 384
３．書名 漁業と国境	

１．著者名 久保明教	４．発行年 2020年
２．出版社 コトニ社	５．総ページ数 213
３．書名 「家庭料理」という戦場ーー暮らしはデザインできるか?	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究プロジェクトの成果の一部は、以下のサイトで公開している。
https://balat.jp/project.html

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	長津　一史 (Nagatsu Kazufumi) (20324676)	東洋大学・社会学部・教授 (32663)	
研究分担者	福永　真弓 (Fukunaga Mayumi) (70509207)	東京大学・大学院新領域創成科学研究科・准教授 (12601)	
研究分担者	大元　鈴子 (Omoto Reiko) (70715036)	鳥取大学・地域学部・准教授 (15101)	
研究分担者	高橋　五月 (Takahashi Satsuki) (50791084)	法政大学・人間環境学部・教授 (32675)	
研究分担者	濱田　武士 (Hamada Takeshi) (80345404)	北海学園大学・経済学部・教授 (30107)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	濱田　信吾 (Hamada Shingo) (00734518)	大阪樟蔭女子大学・学芸学部・准教授 (34409)	
研究分担者	久保　明教 (Kubo Akinori) (00723868)	一橋大学・大学院社会学研究科・教授 (12613)	
研究分担者	井頭　昌彦 (Igashira Masahiko) (70533321)	一橋大学・大学院社会学研究科・教授 (12613)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
イタリア	Food and Agriculture Organization			
インドネシア	National Research and Innovation Agency			